

創刊200号記念 研究室マガジンの8年半を振り返る

200th memorial A look back on eight and a half years of Lab. Magazine

2005年より始まった研究室マガジンが、創刊から8年半が過ぎ、ついに200号の発行を迎えました。本号では『200号記念拡大号』として、過去の記事からマガジンの歴史を振り返ります。まずは2005年～現在までのマガジン年表から...!

創刊号発刊!



酒井憲一編集長による都市デザイン研マガジン創刊号では、『都市保全計画』刊行の記事と、例年4月に行われるプロジェクト報告会の記事が記載されていました。

2005年のプロジェクト報告会では喜多方、蕨の浦、八尾、京浜臨海、谷中、大野村の6プロジェクトが紹介されました。

50号記念拡大号



「定期発行を死守せよ」50号での西村先生の言葉を守り、(多少遅れることはありましたが...)月二回の発行を続け、ついに200号までできました!

50号記念拡大号ではマガジンの「通信簿」を西村、北沢両教授につけて頂きました。お二人とも可・不可なしの好評価でした...!

100号記念拡大号



100号では、4名の歴代マガジン編集長が集合し、「これまでの100号、これからの100号」をテーマに座談会が開かれました。初代編集長の酒井氏は、「不易流行たれ」と語られました。

先生方からのメッセージ

Message from Prof. Nishimura and Assoc. Prof. Kubota.

祝200号、まさに継続は力なり 西村 幸夫 教授

都市デザイン研究室マガジン200号達成、本当にご苦労さまでした。おめでとう、そしてありがとう。私が唯一隅から隅まで定期購読している本誌が8年以上も月2回の定期発行のペースを守り続け、今日に至っていること、歴代編集長や編集委員メンバーに感謝いたします。

スタートは2005年4月15日でした。当時、研究生として所属しておられた朝日新聞記者OBの酒井憲一さんが、研究室プロジェクトの多様さ・豊饒さを外に情報発信しないのもったいないとの趣旨で、自主的に発行を始めたことにありました。サポートについたのがのちに第2代編集長となる坂内良明君。坂内君はその後、北國新聞のプロの記者になりました。その後、編集長のポストも、塩澤諒子さん、牡蛎灰谷愛さん、菊地原徹郎君、阿部正隆君、矢吹剣一君、大森文彦君と引き継がれ、現在の福士薫さんは第9代目ということになります。その間、編集委員も合計1名(つまり酒井編集長のみ)から出発して、現在は8名にまで広がっています。

歴代記事で記憶に残っているのは、まずは100号記念の歴代編集長が集った座談会です(特大4頁、2009年6月10日号)。見出しには「都市デザイン研マガジンは『不易流行たれ』とあります。このほか、毎年の忘年会の様子を実況中継してくれているのですが、あれだけ雑踏と、お酒が入っている中で、正確な記事を書いてくれているのには驚きです。大切に保存している昔のマガジンを見返すと、みんな若く、当時のエネルギーが伝わってくるようです。と言って、今もみんな若く元気なのですが... 今後も愛読しますので、継続期待しています。

200号、おめでとうございます! 窪田 亜矢 准教授

歴代編集長、編集部のみなさんの熱意と素晴らしい情報収集発信力の賜物ですね。心より敬服します。今後のマガジンに向けて一言、ということで、まずは過去のマガジンを振り返ってみました。

100号では「現役世代だけでなく、OBOGの記事も載せてもらえると読者層にも広がりが出るのでは?」と提言しました。すでにそのような取材記事はありましたが、さらに充実していただいて、OBOG訪問はシリーズ化されました。このシリーズ、大好きです。そして100号には北沢先生から「200号を目指して頑張ってください」という激励が寄せられており、その通りになりましたね。続いて150号も読んでみました。「研究室にいると強く感じる、私たちメンバーの『間』にあるものを、マガジンによって研究室の外に伝え続けてほしい」というのが私からの要望でした。マガジンは、そのような役割を今も変わらず担い続けてくれています。深謝。

ということで、この200号では、自分に向けて「たまには寄稿しよう!」という宣言をしておきたいと思います(一年に一回ぐらいかな~)。

初のA3拡大号

2006年のタイへの研究室旅行が初のA3拡大号となりました。それ以降、研究室旅行は毎年拡大号として豊富な写真と共に送っています!



"研究室旅行2006タイ"の日程表には「ニラモンOG結婚式」の文字が...なんと、研究室旅行を機会に、西村先生や中島・野原両助手(当時)、学生十数名で結婚披露宴に参加してきたそうです!



▲初登場時の窪田先生!

デザインマイナーチェンジ!



ここまで淡い緑でかっこよく決めていたマガジンですが、75号からは誌面がカラフルになりました!この75号には窪田先生が本研究室の准教授として着任された時の挨拶が記載されています。

新デザイン登場!



そして200号記念拡大号!

本号、2013年8月10日号をもってついに200号となりました。さて、300号を迎える時、マガジンはどうなっているのでしょうか... 更なる進化に期待です。

誌面デザインの変更に共に編集ソフトもIndesignに変更...毎年、新人編集員は初めて触れるIndesignに四苦八苦しますが報告書作成や論文にも用いる重要なソフトです...

連載企画...

研究室マガジンには様々な連載企画があります。マガジン初期まで通り、各企画の初登場を振り返りました。

社会科見学の他にも、長期休みの旅行記も毎年恒例の記事となっています。研究室メンバーの外の活動も積極的に取り上げています!

『留学生お宅訪問』

マガジン初期から続くこのコーナーの第一回はタイ出身のボンサンさんのお宅。ボンサンさんは昨年博士課程を終了し、今は母国で大学教員をしています。最近あまり見ないこのコーナー、お宅訪問させて頂ける留学生募集中!



ボンサンさん(当時M1)▼

『東京を駆ける』

第一回で終わってしまった幻の企画。ランナーの視点から、東京の都市を考える、という企画です。続きを執筆してくれるランニング好きな方、いませんか?

『留学生コーナー』

日本人が当たり前に見過ぎてしまう姿を留学生の新鮮な目で捉える記事が人気のコーナーです。日本の好きなまちを選んだ理由に、母国のまちと似ている点を挙げる方が多いのが印象的です...

『OB・OGめぐり』

OB・OGの方の受賞報告・結婚報告は初期からマガジンのコンテンツでしたが、105号より本格連載化!第1回は平成11年卒の平野彰秀さんでした!

日本中(いや、世界中!?)でOB・OGが活躍している本研究室。コーナー発足当初の目標は、「全47都道府県のOB・OGをまわること」だったそうです。ちなみに初回で登場した平野さんは岐阜県の石徹白でご活躍中でした。

『Road to Doctor』

当時博士課程在籍のナツポンさんの提案により始まったRoad to Doctor。普段博士の方の研究を聞く機会が中々ない修士の学生は特に熱心に読んでいるのではないのでしょうか。



▲昨年度に修了されたナツポンさん

Road to Doctor 第一弾はもちろん提案者のナツポンさん!石見銀山を対象としたliving heritageの研究をされていました。

研究室マガジンの思い出

Recollections of Lab. Magazines

都市デザイン研究室に在籍している4名の助教の方々に、「印象にのこっている記事」をテーマに寄稿して頂きました。

Public Space — continuously negotiated, never completed, ever evolving

Christian Dimmer 助教

At the occasion of the 200th installment of the Urban Design Magazine, I want to revisit a public space, already covered in issue 134: Miyashita Park, Shibuya.

Like the city itself, public life is constantly evolving, and so are the spaces that nurture diverse public interaction. For students of the urban it is thus important to examine how particular places are emerging, how they are inhabited and appropriated by members of different societal groups, and how these stake their specific claims to space. What makes a good public space 'work'? What does that actually mean and how do we define it? Does a place equally 'work' for all social groups, and is that even possible? Rather than attempting to provide definite answers to these difficult questions, I would like to invite all those studying the built environment to revisit certain public places over time and carefully examine these. Against initial concerns, Miyashita Park for example, did not fully turn into a privatised theme park after it's Nike-financed reengineering: People of various walks of life and social backgrounds seem to co-exist here today; representing a miniature of Japan's diversifying society.



▲第134号にも記載された渋谷の宮下公園

"日常"の研究室マガジン

黒瀬 武史 助教

都市デザイン研マガジン創刊はちょうど、僕が修士1年のときでした。酒井編集長発行の2号に自分の記事を載せていただいて、なんだか恥ずかしかったことを思い出します。就職してからは、仕事の合間に、何となく最新のマガジンを探して読んで、懐かしさを覚えつつも、ちょっぴり寂しかったり。新社会人の心のすき間を埋めてくれました。

大学に戻ってからは、毎回楽しく紙で読んでいますが、実は編集後記を楽しみにしてしまっていて、普段は垣間見えない、編集員の方々の生活の風景に癒されています。日常という意味で、過去200号を振り返ると、研究室大掃除と机のレイアウトの記録は、実は貴重な研究室の町割記録なのではないでしょうか。

例えば、116号の大掃除の記録には、「軸を通す」、「間の確保」など当時の計画の流行が伺えたり？、144号での計画は当時の矢吹新編集長と一緒に僕も色々考えて決めたのですが、結果として短命に終わりました。都市の風景もそうですが、当たり前の日常が研究室で過ごすみんなの大切な記憶になります。これからも研究室の日常の積み重ねをしっかりと記録してくれるマガジンであり続けて欲しいです。



▲116号の研究室大掃除

知られざる西村教授の姿

松田 達 助教

特に印象に残ったのは、やはり「西村先生還暦祝賀記念拡大号！」ですね。西村先生の年譜を、知られざる多くの写真とともに知ることが出来たのは、都市デザイン研究室の歴史にとっても、大きな意義を持っていると思います。研究室メンバー数の変遷がグラフになっているところもよいですね。

そしてなんとといっても西村先生のおそらく20代の頃の2枚の写真！いまもイケメンですが、この頃の先生のイケメンぶりが、一番衝撃でした(笑)。



▲これが噂の西村先生の若き頃の写真...確かにイケメン！

自分の立ち位置を思い返す記事たち

中島 伸 助教

改めて199号に及ぶマガジンの記事を見ると色々な思いが去来しますが、個人的に印象深いものを2つ選びました。

■90号「2009年都市デザイン研究室新年会—新年の饗、西村・北沢・窪田演説に酔いしれる—」

北沢先生の出席された最後の忘年会(この年は新年会だった)。毎回先生方のスピーチの言葉はどれも印象に残っているものだが、この年はどうしても忘れがたく強い印象に残った。翌2009年の忘年会での西村先生と窪田先生の言葉(第114号掲載)も北沢先生が亡くなられる半月前のことで併せて色々今でも思い巡らすことがある。

■19号 仮題「都市空間の構想力」の解き起し—西村教授単独会見「ベルクまちあるぎその後」—

自分がまだ都市デザイン研究室に入る数ヶ月前で筑波大で修論の追い込みをしていた頃、翌年度に向けて西村先生の構想が語られた。自分にとって、これから追い求める都市デザインに希望を持った出発点の大事な記事。



▲19号 西村教授単独会見

マガジン編集部より

Message from Magazine editors text_fukushi

おかげさまで、研究室マガジンも200号を迎えることが出来ました。マガジンの変遷を振り返ると、歴代の先輩方が研究室の変化に応じて、それぞれの強い思いをもって情報発信の仕方を工夫されてきたことを感じ、これからもそのようなマガジンづくりをしていきたいと改めて思います。皆様に有意義で楽しい話題をご提供できるよう、編集部一同より一層頑張っていきますので、今後ともご愛読よろしくお願いたします。



▲全199号がそろった編集部愛用のマガジンファイル。もうパンパンです！

連載企画

"Road to Doctor"

An Essay by doctoral student vol.6!

Reshaping Participatory Planning through Regional Social Network Service (Regional SNS) :

Focusing on High-rise High-density Towns in Gyeonggi Province

D3 尹柱善

In Korea, highly compressed economic growth since the 1960s led to severe housing shortage. In order to solve the housing problem, the Korean government had promoted a high-rise high-density apartment construction policy. As a result, while housing supply ratio was increased, short-term massive construction also caused undesirable side-effects such as poor infrastructure, lack of participation and uniform landscape. Meanwhile, since the late 1990s, participatory planning (Maeulmandeulgi) has become a new paradigm to overcome the limitations of modern urban planning. Nevertheless, as the ratio of apartments accounts for 60% of total residential housing, Maeulmandeulgi regarding apartments has seldom been conducted. In general, participation works best when the group is small and homogeneous. Conventional participatory planning methods in high-rise high-density urban areas revealed many limitations. Although face-to-face communication is still important and can never be replaced, 'regional SNS' has recently emerged to supplement these limitations.

I explored robust Korean regional SNSs of high-rise high-density residential areas (1) to verify an impact of regional SNS

人数の多い都市デザイン研究室。よりお互いの研究について知る機会を作ろう！ということで、博士課程のメンバーの研究内容に迫るコーナーです。第6回目はD3の尹さんです。

in Maeulmandeulgi, (2) to understand characteristics of regional SNS, and (3) to offer design principles to build and manage the good regional SNS. Firstly, I reviewed the history of regional SNS in Korea from 1998, when the first regional SNS appeared. I divided it into 4 periods based on their properties, managing bodies and initiatives. Secondly, I conducted enumeration survey of regional SNSs targeting the capital area where regional SNS are most vigorously activated. Lastly, I extracted the 2 most successful regional SNS practices regarding improvement of urban space to conduct a case study.



▲(Left) neglected blocked side walk regardless of individual civil complaints since 2007 (Right) widened 3 months after an official request of the Regional SNS in 2011

社会科見学部

都市再生特別地区を考える

Thinking about Special Urban Renaissance Districts

—「京橋の丘」を見学—

—Visit to "Kyobashi no Oka"—

都市再生特別地区を利用した新しい開発である東京スクエアガーデンの見学に編集部が行ってまいりました！

text_takanashi



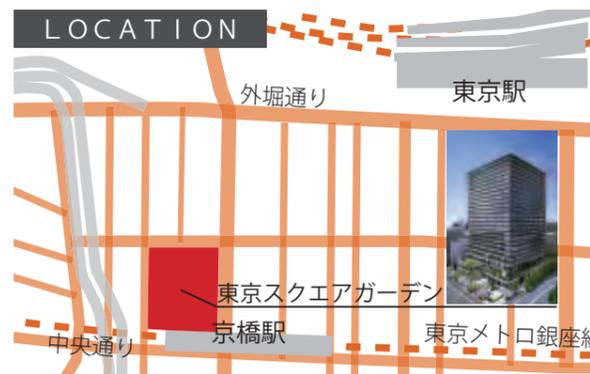
▲「京橋の丘」 ▲区環境施設で説明を受ける

7月30日(火)に催されたマガジン編集部の社会科見学は、都市再生特別地区を利用した新規の開発である東京スクエアガーデンの見学に行ってきました。この開発は元々800%の指定であった容積率を1290%まで「特区」を用いて拡張した計画で、メンバーはその提案書を片手に見学しました。都市再生への貢献としては「京橋の丘」という緑地、歩行者空間、エリアエネルギーマネジメントセンターなどの設置などを中心にあげられていました。

大きな平面オフィス空間の創生のためにもともと町人地であった細長い街区が統合されていて、もともと街路であった部分の低層部が綺麗な通路になっていましたが、そこを自転車で通り抜けようとして注意されている人がいました。空間の設置だけではなく、その後その場がどう利用されるのか、その実態がいかなるものになったのかを合わせての評価が課題ではないかと考えました。



▲京橋エリアの電力使用をフィードバック ▲設置された通路と禁止看板



8月の予定

- 8月17日 佐原現地調査
- 8月21~25日 大塚現地発表 吉里吉里ギャラリー
- 8月30日 建築学会 北海道大会
- ~9月1日 (31日夜に懇親会を予定)

Information

編集後記

柏原 葉那

200号という記念すべき号の編集担当に当たりドキドキの発行です。8年半の歴史を遡る作業では、一枚一枚捲る度について手が止まり、思いの外時間がかかってしまいました…。8年半前と言えば、私は高校に入学したばかり。建築にも都市にもそんなに興味はなく、毎日部活動に力を注いでいました。マガジンの歴史とともに、自分のこれまでの8年半も何となく振り返ってしまう編集作業でした…。